

中山道 美濃路

皇女和ノ宮の御降嫁と大湫宿

世紀の大維立・文元年十月三日御泊

岐阜県瑞浪市

中山道の文化と史跡を守る会発行

(瑞浪市大湫町四六〇 渡辺俊典)



一、皇女和ノ宮の中山道降嫁

和ノ宮は仁孝天皇の第八皇子（時の孝明天皇には皇妹・明治天皇には六才上の叔母宮・弘化三年生れ）で、夫君となる十四代将軍家茂とは同年の十六才。降嫁のための中山道下向は文久元年秋、当大湫宿御宿泊は十月二十八日のことでした。和ノ宮の将軍家のへの降嫁のことは、それまでの代々將軍への宮姫への奥入れとは原因を異にし、外國艦船の来朝に端を発した朝幕反目に終止符を打ち、動搖限らない幕末期の国政を一本化しようという公武合体論実現のために考えられた政策結婚といえ、当の和ノ宮は有栖川宮熾仁親王との、一方の家茂も伏見宮倫宮との婚約をそれぞれ破談にしての奥入れで、朝廷と幕府つまりは國を挙げての降嫁であり、國の存亡を救うためという下向でした。

幕府から再三の降嫁請願書によって、万延元年（一八六〇）十月には和ノ宮降嫁の勅許がようやく出ますが、幕府の外交政策をめぐって朝廷方に不信が生じたりし、幕府から再度請願書が提出されたりして一年後の十月によようやく実現となつたこの降嫁だけに、朝廷方ではその行列に威信をかけ、幕府方も道中の警護には専心して万全の警護を沿道諸藩に命じ、宿・助郷・当分助郷といった沿道各村々の総力を挙げてという前代未聞の大維立が行われるのです。

和ノ宮は文久元年十月二十日に京都桂御所を出て大湫宿で二泊、あと美濃十六宿では赤坂（二十五日）、加納（二十六日）、太田（二十七日）、大湫（二十八日）、中津川（二十九日）の五宿に、木曾十一宿では三留野、上松、萩原の三宿で、江戸までの維立人馬約七十万人、二万疋、江戸溝水御殿入りは十一月十五日のことで、江戸までの維立人馬約七十万人、二万疋、一三四里、二十五日間の大維立てでした。

一、和ノ宮と大湫宿

和ノ宮が大湫宿で旅の一晩を過ごされたのは文久元年（一八六一）十月二十八日、天気快晴の初冬のことでした。宮の胸中は、降嫁決定後に京都で詠まれたという「惜しまじな君と民とのためなら身は武藏野の露と消えても」の歌や、道中の美濃の呂久の渡しでいう「落ちて行く身と知りながる紅葉の人なつかしくこれがこそすれ（大坂市赤坂町和宮公園歌碑）」の歌に便ふことができ、大湫宿での宮についても「住みなれし都路出でて今日幾日、當日（和ノ宮本降）、後日の四組に分かれて宿泊、それを供奉し、朝廷方ではその行列に威信をかけ、幕府方も道中の警護には専心して万全の警護を沿道諸藩に命じ、宿・助郷・当分助郷といった沿道各村々の総力を挙げてという前代未聞の大維立が行われるのです。

和ノ宮は文久元年十月二十日に京都桂御所を出て大湫宿で二泊、あと美濃十六宿では赤坂（二十五日）、加納（二十六日）、太田（二十七日）、大湫（二十八日）、中津川（二十九日）の五宿に、木曾十一宿では三留野、上松、萩原の三宿で、江戸までの維立人馬約七十万人、二万疋、江戸溝水御殿入りは十一月十五日のことで、江戸までの維立人馬約七十万人、二万疋、一三四里、二十五日間の大維立てでした。

一、四日間の大行列

宮の行列は御生母親行院・差副宰相典侍ノ局・同能登ノ局をはじめ宮付の上薦・年寄・中薦らの女官をはじめとして橋本実麗・同実娶・中山長季・小倉長季・広橋光成・野宮定功・菊亭実順・今城定国・千種有文・葉室長順・岩倉具視・富小路敬直・北小路俊昌・八条隆祐・坊城俊克等々の公卿のほか、幕府からの加納遠江守・戸川播磨守・松尾伯耆守・鶴脚加賀守らの一行がこれを供奉し、諸士・同心・通し人足らを加えて約五千人。これが前々日、前日、当日（和ノ宮本降）、後日の四組に分かれて宿泊、そして道中をつづけたもので、宮の輿入れ道具は専属の通し人馬の分担でしたが、他の諸諸侯の荷は宿・助郷・加助郷（当分助郷）人馬が分担しました。その為に集められた維立人馬は大湫宿分（お泊りの大湫宿を中心とし、木曾十一宿では三留野、上松、萩原の三宿で、江戸までの維立人馬約七十万人、二万疋、一三四里、二十五日間の大維立てで、まさに世界でも比類のない、國を挙げての大行列、大維立てでした。

一、和ノ宮と大湫宿

和ノ宮が大湫宿で旅の一晩を過ごされたのは文久元年（一八六一）十月二十八日、天気快晴の初冬のことでした。宮の胸中は、降嫁決定後に京都で詠まれたという「惜しまじな君と民とのためなら身は武藏野の露と消えても」の歌や、道中の美濃の呂久の渡しでいう「落ちて行く身と知りながる紅葉の人なつかしくこれがこそすれ（大坂市赤坂町和宮公園歌碑）」の歌に便ふことができ、大湫宿での宮についても「住みなれし都路出でて今日幾日、當日（和ノ宮本降）、後日の四組に分かれて宿泊、それを供奉し、朝廷方ではその行列に威信をかけ、幕府方も道中の警護には専心して万全の警護を沿道諸藩に命じ、宿・助郷・当分助郷といった沿道各村々の総力を挙げてという前代未聞の大維立が行われるのです。

和ノ宮は文久元年十月二十日に京都桂御所を出て大湫宿で二泊、あと美濃十六宿では赤坂（二十五日）、加納（二十六日）、太田（二十七日）、大湫（二十八日）、中津川（二十九日）の五宿に、木曾十一宿では三留野、上松、萩原の三宿で、江戸までの維立人馬約七十万人、二万疋、江戸溝水御殿入りは十一月十五日のことで、江戸までの維立人馬約七十万人、二万疋、一三四里、二十五日間の大維立てでした。

一、和ノ宮と大湫宿

和ノ宮が大湫宿で旅の一晩を過ごされたのは文久元年（一八六一）十月二十八日、天気快晴の初冬のことでした。宮の胸中は、降嫁決定後に京都で詠まれたという「惜しまじな君と民とのためなら身は武藏野の露と消えても」の歌や、道中の美濃の呂久の渡しでいう「落ちて行く身と知りながる紅葉の人なつかしくこれがこそすれ（大坂市赤坂町和宮公園歌碑）」の歌に便ふことができ、大湫宿での宮についても「住みなれし都路出でて今日幾日、當日（和ノ宮本降）、後日の四組に分かれて宿泊、それを供奉し、朝廷方ではその行列に威信をかけ、幕府方も道中の警護には専心して万全の警護を沿道諸藩に命じ、宿・助郷・当分助郷といった沿道各村々の総力を挙げてという前代未聞の大維立が行われるのです。

和ノ宮は文久元年十月二十日に京都桂御所を出て大湫宿で二泊、あと美濃十六宿では赤坂（二十五日）、加納（二十六日）、太田（二十七日）、大湫（二十八日）、中津川（二十九日）の五宿に、木曾十一宿では三留野、上松、萩原の三宿で、江戸までの維立人馬約七十万人、二万疋、江戸溝水御殿入りは十一月十五日のことで、江戸までの維立人馬約七十万人、二万疋、一三四里、二十五日間の大維立てでした。

一、和ノ宮と大湫宿

和ノ宮が大湫宿で旅の一晩を過ごされたのは文久元年（一八六一）十月二十八日、天気快晴の初冬のことでした。宮の胸中は、降嫁決定後に京都で詠まれたという「惜しまじな君と民とのためなら身は武藏野の露と消えても」の歌や、道中の美濃の呂久の渡しでいう「落ちて行く身と知りながる紅葉の人なつかしくこれがこそすれ（大坂市赤坂町和宮公園歌碑）」の歌に便ふことができ、大湫宿での宮についても「住みなれし都路出でて今日幾日、當日（和ノ宮本降）、後日の四組に分かれて宿泊、それを供奉し、朝廷方ではその行列に威信をかけ、幕府方も道中の警護には専心して万全の警護を沿道諸藩に命じ、宿・助郷・当分助郷といった沿道各村々の総力を挙げてという前代未聞の大維立が行われるのです。

和ノ宮は文久元年十月二十日に京都桂御所を出て大湫宿で二泊、あと美濃十六宿では赤坂（二十五日）、加納（二十六日）、太田（二十七日）、大湫（二十八日）、中津川（二十九日）の五宿に、木曾十一宿では三留野、上松、萩原の三宿で、江戸までの維立人馬約七十万人、二万疋、江戸溝水御殿入りは十一月十五日のことで、江戸までの維立人馬約七十万人、二万疋、一三四里、二十五日間の大維立てでした。

和ノ宮が大湫宿で旅の一晩を過ごされたのは文久元年（一八六一）十月二十八日、天気快晴の初冬のことでした。宮の胸中は、降嫁決定後に京都で詠まれたという「惜しまじな君と民とのためなら身は武藏野の露と消えても」の歌や、道中の美濃の呂久の渡しでいう「落ちて行く身と知りながる紅葉の人なつかしくこれがこそすれ（大坂市赤坂町和宮公園歌碑）」の歌に便ふことができ、大湫宿での宮についても「住みなれし都路出でて今日幾日、當日（和ノ宮本降）、後日の四組に分かれて宿泊、それを供奉し、朝廷方ではその行列に威信をかけ、幕府方も道中の警護には専心して万全の警護を沿道諸藩に命じ、宿・助郷・当分助郷といった沿道各村々の総力を挙げてという前代未聞の大維立が行われるのです。

和ノ宮が大湫宿で旅の一晩を過ごされたのは文久元年（一八六一）十月二十八日、天気快晴の初冬のことでした。宮の胸中は、降嫁決定後に京都で詠まれたという「惜しまじな君と民とのためなら身は武藏野の露と消えても」の歌や、道中の美濃の呂久の渡しでいう「落ちて行く身と知りながる紅葉の人なつかしくこれがこそすれ（大坂市赤坂町和宮公園歌碑）」の歌に便ふことができ、大湫宿での宮についても「住みなれし都路出でて今日幾日、當日（和ノ宮本降）、後日の四組に分かれて宿泊、それを供奉し、朝廷方ではその行列に威信をかけ、幕府方も道中の警護には専心して万全の警護を沿道諸藩に命じ、宿・助郷・当分助郷といった沿道各村々の総力を挙げてという前代未聞の大維立が行われるのです。

和ノ宮が大湫宿で旅の一晩を過ごされたのは文久元年（一八六一）十月二十八日、天気快晴の初冬のことでした。宮の胸中は、降嫁決定後に京都で詠まれたという「惜しまじな君と民とのためなら身は武藏野の露と消えても」の歌や、道中の美濃の呂久の渡しでいう「落ちて行く身と知りながる紅葉の人なつかしくこれがこそすれ（大坂市赤坂町和宮公園歌碑）」の歌に便ふことができ、大湫宿での宮についても「住みなれし都路出でて今日幾日、當日（和ノ宮本降）、後日の四組に分かれて宿泊、それを供奉し、朝廷方ではその行列に威信をかけ、幕府方も道中の警護には専心して万全の警護を沿道諸藩に命じ、宿・助郷・当分助郷といった沿道各村々の総力を挙げてという前代未聞の大維立が行われるのです。

和ノ宮が大湫宿で旅の一晩を過ごされたのは文久元年（一八六一）十月二十八日、天気快晴の初冬のことでした。宮の胸中は、降嫁決定後に京都で詠まれたという「惜しまじな君と民とのためなら身は武藏野の露と消えても」の歌や、道中の美濃の呂久の渡しでいう「落ちて行く身と知りながる紅葉の人なつかしくこれがこそすれ（大坂市赤坂町和宮公園歌碑）」の歌に便ふことができ、大湫宿での宮についても「住みなれし都路出でて今日幾日、當日（和ノ宮本降）、後日の四組に分かれて宿泊、それを供奉し、朝廷方ではその行列に威信をかけ、幕府方も道中の警護には専心して万全の警護を沿道諸藩に命じ、宿・助郷・当分助郷といった沿道各村々の総力を挙げてという前代未聞の大維立が行われるのです。

和ノ宮が大湫宿で旅の一晩を過ごされたのは文久元年（一八六一）十月二十八日、天気快晴の初冬のことでした。宮の胸中は、降嫁決定後に京都で詠まれたという「惜しまじな君と民とのためなら身は武藏野の露と消えても」の歌や、道中の美濃の呂久の渡しでいう「落ちて行く身と知りながる紅葉の人なつかしくこれがこそすれ（大坂市赤坂町和宮公園歌碑）」の歌に便ふことができ、大湫宿での宮についても「住みなれし都路出でて今日幾日、當日（和ノ宮本降）、後日の四組に分かれて宿泊、それを供奉し、朝廷方ではその行列に威信をかけ、幕府方も道中の警護には専心して万全の警護を沿道諸藩に命じ、宿・助郷・当分助郷といった沿道各村々の総力を挙げてという前代未聞の大維立が行われるのです。

御富宿可児薬師

御富宿可児清水

津幡の辻

鶴之巣一里塚

江戸時代の宿駅は、もともと軍事的な緊急事態時の駅伝や、勤使・將軍名代などの朱印維立（定質駅）の三種類の官用・公用維立でが障壁なく行われるために設けられたものでした。

やがて參交交代制度による大名通行や代参などによる公家・門跡の大通行（一部定質）がこれに加わり、さらには一般庶民の旅や商人荷物の輸送（相對質駅）にも使用されるようになって宿泊施設（旅籠星など）も整い、街道も各宿々も賑うようになり明治初期まで続きました。

こうした中で、代々の將軍がいずれも宮家や公家の姫君を正妻に迎えるようになると、この宮姫たちの道中には中山道が使用されました。これは東海道の混雑防止や川止め、遠